

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 1

ここから先のくだりは理解が進むと言霊の霊を知ることに繋がると、島田先生は言われています。

その 434

古事記の本文を先に進めます。

ここに その妹伊耶那美の命を 相見まくおもほして 黄泉国に を追い住でましき。ここに 殿 藤戸より出て向かへたまふ時に、伊耶那岐の命語るらひて詔りたまひし区く、「愛しき我が汝妹の命、吾と汝と作れる国、いまだ作り竟えずあれば、還りまさね」と詔りたまひき。ここに伊耶那美の命の答えたまはく、「悔しかも、速く来まさず。吾は黄泉戸喫しつ。然れども愛しき吾が汝兄せの命、入り来ませること恐し」かれ還りなむを。しまらく黄泉神と論はむ。我をな視たまひそ」と、かく白して、その殿内に還り入りませるほど、いと久しく待ちかねまひき。かれ左の御髻に刺せる湯津爪櫛の男柱一個取り闕きて、一つ火燭して入りみたまふ時に、蛆たかれころろぎて、頭には大雷居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷居り、陰には折雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足に伏雷居り、併せて八くさの雷成り居りき。

はじめに伊耶那岐伊耶那美の命は共同で 三十二の実相子音を生み。これを迦具土として表音神代文字に表しました。そこで主体である伊耶那美の命の高天原精神界での仕事は終わり、精神要素である

五十音言霊の整理・運用の確認の仕事はもっぱら主体である伊耶那岐の命の責任において行われ、つ

いに主体側内部に建御雷の御の神という理想の精神構造を確立しました。

先に触れましたようにこの段階を審理の自証と申します。またその心理の運用法として 闇淤加美（握手）と闇御津羽（掟）の二つあることと、この運用を進めることによって限りなく人類文明を創造して行くことができる^{あめ}天の^お尾^は羽^{ばり}張の剣の活用とを確認できたのでした。

さて伊耶那岐の命の仕事は、自らの心中に自証された真理をふまえながら、この心理がいかなる時 なる場合にも おいても真理である絶対的な真理として確立させるために自証から他証に移る作業を開始することです。自証を他証に移すためには、自らの心に確かめられた原理を 他の世界に適応してみることから

始まります。

その 435 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 2

その 435

ここに その妹伊耶那美の命を 相見まくおもほして 黄泉国に を追い往でましき

この文章そのままの意味を言えば「いとしい妻に会いたくなって、伊耶那岐の命は美の命の住む黄泉国に追いかけていった」と言うことになります。古事記神代の巻は言霊原理の書でありますから、もちろん単なる岐美神の恋物語ではありません。主体的な心理を確立した岐の命が、協同の仕事の役目を果たして去っていった美の命の本来の領域である客観世界へ行って、その世界がいかなる内容、価値があるのか、自らの心理を適用して見る事が可能であるかどうかを調べようと追いかけて行ったことであります。

ここに黄泉国という言葉が出ました。古事記の種々の注釈書を見ますと、「地下にある空想の国」とか「死後の世界」などと書かれていますが、それはこの文章が言霊の教科書であることを知らないための誤りです。黄泉国はまた^{よもつくに}予母都国や^{よもつくに}四方津国などとも書きます。

黄泉国とは種々の文化の^{あらかじめ}予の母なる都の国という意。言霊原理に則って洗練されてはいない文化が始まる国といった意味です。四方津国とは^{ことだまきちわう}言霊幸倍う日本以外の、日本からみて四方の国、すなわち外国のことをさします。

霊の本、日本は言霊の幸倍^{さちわう}う高天原、それに比べ外国は洗練された言霊原理の無い種々の文化が興
 廃を繰り返す国ということです。なぜならそれは精神の理想の構造原理の備わっていない、客観世界の
 観察を重視しようとする地方であるからです。伊耶那岐の命は心の中に理想の精神構造の自覚を持ち
 ながら、さらに未完成の混沌とした客観世界へ出て行ったのであります。

その 436 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 3

その 436

ここに 殿 ^{との} 藤戸 ^{くみど} より出て向かへたまふ時に、

殿とは「みあから」と読み、神の家のごとで、言霊図を指します。藤戸^{くみど}とは閉まった戸の意。古事記の
 ある本には藤戸^{あがりど}と書いてあるものもあり、そう書くと一層意味は明瞭になります。お風呂の上がり湯とい

えばお風呂から出るとき被るかぶるきれいなお湯のこと。言霊図の^{あがりど}滕戸と言えばアから始まって八つの父韻をへて半母音ワに終わりますから最後の行ワ行の ということです。

高原客観世界に出て行くには客体であるワ行より出て行くことになります。^{くみど}滕戸と言って閉まった戸とは高原と客観世界との間を閉ざしたとの意味です。このことについては後章その内容が詳しく説明されます。

伊耶那岐の命語るらひて詔りたまいし区く、「^{うつく}愛しき^あ我が^{なにも}汝妹の命、吾と汝と作れる国、いまだ作り^ま竟えずあれば、還りまさね」と詔りたまひき。

伊耶那岐の命は伊耶那美の命と話をしして次のように言いました。「愛する妻よ、私とあなたと共同で作った国はまだ完成していません。還ってきてくださいますか。」主体と客体との共同作業で創造・確認し、それを表現することのできた言葉の原理は、これを応用してまだまだ種々の文明活動を広げていかなければなりません。今後も 共に力を合わせようではありませんか、という意味であります。

この主観と客観の両世界の共同という伊耶那岐の命が呼びかけた問題は、これより後の章において、岐美二神すなわち主体と客体の交渉の決裂によって人類文明創造上の大きなドラマが歴史上 実際に展開されることと成ります。人類の精神文明と物質科学文明という二大文明の創造の歴史の物語のことです。

その 437 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 4

その 437

ここに伊耶那美^{イハナミ}の命の答えたまはく、「悔^としかも、遠く来^とまさず。吾は黄泉戸^{ヨミツヘクミ}喫^くしつ。

伊耶那美^{イハナミ}の命は答えて言いました「残念です。貴方^{あなた}がお別れ^{わか}してからすぐいらっしやらなかった^なので私は黄泉国^{ヨミツ}の食べ物^{たべもの}を食べてしまいました。」

高天原^{タカマツヒ}の言霊^{ことだま}の原理^{りしり}に基づいた理路^{りじろ}整然^{せいぜん}とした言葉^{ことば}の道理^{だうり}ではない、外国^{がいこく}の不完全^{ふくせん}な整理^{せいり}されてい
ない文字^{もじ}や学問^{がくもん}を経験^{けいけん}してしまいました。旧約聖書^{きうやくせいしよ}にある「イブ^{イブ}が蛇^{へび}に誘惑^{ゆうわく}されて禁断^{きんたん}の知恵^{ちゑ}の木^きの実^み

を食べてしまいました。」

然れども愛しき吾が汝兄^{なせ}せの命、入り来ませること恐^{かしこ}し」かれ還りなむを。しまらく
黄泉神^{よもつかみ}と論^{あげつら}はむ。我をな視たまひそ」

しかしせっかくあなたがわざわざ迎えに来てくださったのですから還ることに致しましょう。その前にこの黄泉

国の神とその文化について議論をして参りますから、私を見ないでください、美の命は申しました。

高天の原に 言霊布斗麻邇の精神原理があるように、黄泉国にも極めて不完全で未整理の言葉や

学問があります。この客観世界の文明を 客観世界の文明を発展させることが私の使命とっておりますので、しばらその役目の人々と詳しい話をしてきますから、待っていてください。まだ不完全な学問ですから中を見ないでください。と言うわけであります。

後の文の中で伊耶那岐（主体）と伊耶那美（客体）の世界の学問の間の決定的な違いを確認し、その後は伊耶那美の命自身が黄泉大神（外国文化の中心思想）となって物質科学文明を、推進することと成ります。ですからその時代は客観世界の物質文明はまだ揺籃（ようらん）時代であったから「恥ずかしいから見ないでください」と言ったわけであります。

かく^{もほ}白して、その殿内に還り入りませるほど、いと久しく待ちかねまひき。

伊耶那美^{イナメ}の命はそう言って黄泉の国へ行つたきり、久しく出て来ません。伊耶那岐^{イナギ}の命は待ちきれなくなりました。実際に客観精神の伊耶那美^{イナメ}の命がその独自の物質科学文明を完成するには、その後数千年を要することになります。

その 438 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 5

その 438

かれ左の御髻^{みみづら}に刺せる湯津爪櫛^{ゆつつまぐし}の男柱^{おとこはしら}一個取り^{ひとつ}闕きて、一つ火燭して入りみたまふ時に、

湯津^{ゆつ}（ゆつ）は五百個^{いほつ}（いほつ）の意。五を基調とした百個と言うこと。爪櫛^{つまぐし}（つまぐし）とは髪（神）を櫛削^{くしけず}（くしけず）る道具のことで 湯津爪櫛^{ゆつつまぐし}（ゆつつまぐし）全体で五十音言霊音図をさします。音図は櫛の歯の形をしています。古事記後章では櫛稻田姫^{くしなだひめ}（くしなだひめ）などの名で喩えられま

す。左の御髻（みみずら）というのは音図の向かって右方。男柱一個とはアオウエイの事。主体の五母音です。

その「一つ火」と言えば 5 母音の中の一つであります。妻神を恋う心ととれば感情である言霊アのことであり、まだ知らない世界への好奇心と取れば言霊オとなります。その一つの心をもって、妻神が入ったまま、なかなか出てこない黄泉国の文化を覗き見た、というわけであります。

蛆たかれころろぎて、

中を覗いてみると、伊耶那美の命の身体には蛆虫（うじむし）がたかって音を立てていた。蛆（うじ）とはウの字のことで、ウ言霊である五感感覚から出た欲望の産物、万有の姿に即して作られた文字や学問のことです。それらの文化がすべて自我を主張してゴロゴロと鳴り、客観世界の文化は完成と調和には程遠い状態であった、ということなのです。

頭には大雷居り、胸には火の雷居り、腹には黒雷居り、陰には折雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足に伏雷居り、併せて八くさの雷成り居りき。

黄泉国の外国の文化を学んでしまった伊耶那美の命の心には 八種類の文字の原理が染み込んでしまっていた。

雷（いかずち）は五十神土の意味で文字を粘土板に刻んだもの、ではあるが、この場合は外国の文字のことであります。前にお話ししました日本の八つの山津見神（やまつみ）の文字のことではありません。ですから岐美二神の共同の創造である 言霊百神の中には入れない黄泉国である外国の種々の文字の原理を八種の雷と言って表したわけです。

その 439 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 6

その 439

ここに伊耶那岐の命、見畏みて逃げ還り給う時に、その妹伊耶那美の命、「吾に恥見せつ」と言いて、すなわち黄泉醜女（よもつしこめ）を遣わして追はしめき。ここに伊耶那岐の命、黒御鬘（くろみかずら）を投げ棄てたまひしは、すなわち蒲子生りき。

こを撫（ひり）ひ食む間に逃げ出でますを、おなお追いしかば、またその右の御鬘（みみかずら）に刺せる湯津爪櫛を引き闕（か）きて投げ棄（う）てたまえば、すなわち筍（たかむな）生（な）りき。

ここに伊耶那岐の命、見畏（みかしこ）みて逃げ還り給う時に、

伊耶那岐の神は黄泉国にいる妻神の体に蛆たかっているように、その心の中にいろいろな外国の未完成の文化の文字原理がわだかまっている姿を見て、その自己主張と不調和の世界に恐れをなし、ここは

長くとどまるどころではないと、自分の住家である高天原に逃げ帰ってこようとした。

逃げ帰る、と言ってもただ逃げて来るのではありません。伊耶那岐の命は自分心の中で物事の処理創造にあたる理想の心構え（建御雷の男の神）を確立し、その自証された精神をもって客観の世界へ行きました。

そこで高原の完成された精神とは違う客観世界の未完成・不調和の醜い文化を見たのです。そして再び伊耶那岐の命は 自らの世界へ帰ります。この行動によって完成された理想の精神法則と未完成の物質文明が出合ったこととなります。

そこに当然主観的精神の中において、客観世界のものをどう処理したら良いか、の活動が起こることと成ります。それは自証の精神がさらに他証されて主観・客観ともに証明される過程としての活動が展開されることと成ります。

その 440 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 7

その 440

その妹伊耶那美の命、「吾に恥見せつ」と言いて、すなわち黄泉醜女（よもつしこめ）を遣わして追はしめき。

妻神伊耶那美の命は、自分の受け持っている客観世界の創造はまだ緒についたばかりのところ、未完

成であるから「見ないでください」と言ったのに、夫神が中を見てしまった。「恥をかかせましたね」と言って黄泉醜女（よもつしこめ）に命じて追いかけさせた、という意。

黄泉は外国。男の言葉に対して、女は文字のことです。夫神の心を外国の文字の原理の思想をもって虜にしようとしたことです。醜女の醜はみにくいので、未完成・不調和の原理を表します。この物語の時代から客観世界の科学原理の完成の現在まで、数千年もかかった事を思えば、この文章の気持ち了解されます。

ここに伊耶那岐の命、黒御鬘（くろみかづら）を投げ棄てたまいしは、すなわち蒲子（えびかづら）生（な）りき。

鬘（かづら）とは書き連ねる、の意。また鬘（かつら）は頭にかぶせることから心の装（よそほ）ひいの意味を表わし、音図の上段であるア段の音の連なりのことです。これを仏教では華鬘（げまん）といい、古代ギリシアではローレル（柱の冠）で表現しました。カサタナハマヤラの八音のことをさします。

黒御鬘（くろみかづら）とありますから八音の中の陰性音を意味し、濁点のつけられない、マヤラナの四音をさします。心の先天の章でお話ししましたように、主体のアと客体のワを結ぶ八音の中で、陽性音であるカサタハの四音は主体が客体に呼びかける律動であり、マヤラナの四陰性音は主体の呼びかけに応える客体の応答の律動であります。

伊耶那岐の命は追いかけてくる黄泉醜女（よもつしこめ）にこの精神世界より見た物質世界の法則を投げ与えてやった、ということです。すると蒲子（えびかづら）が生った、とあります。蒲子とは知恵

(ちえ)の言霊(ひ)の書連(かづら)の意です。物質世界研究に参考となる言霊の原理・法則ということであります。

その 441 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 8

その 441

こを撫(ひり)ひ食む間に逃げ出でますを、おなお追いしかば、またその右の御鬘(みみかずら)に刺せる湯津爪櫛を引き闕(か)きて投げ棄(う)てたまえば、すなわち 筍(たかむな)生(な)りき。

追いかけて来た黄泉醜女である外国の文字の原理の文化思想は、よいものが落ちている、と言って拾って研究吸収しようとした。その際に伊耶那岐の命は高天原に帰る道を急ぎましたが、さらに 黄泉醜女(よもつしこめ) 追いかけてきました。

そこで伊耶那岐の命は「右の御鬘（みみかづら）に刺せる湯津爪櫛（ゆつつまぐし）」を投げ棄てました。右の御鬘とは音図右の半母音 ワヲウヱヰのこと。音図の左の男柱のア行は主体であり、初めであり、それに対して右の女性のワ行は客体であり、終わりです。

またア行は知性の出発であり、ワ行は結論であります。はワ行を投げ捨てた、ということは 物事現象を精神原理から見た時の結論を投げ与えたということです。

事実、歴史的に見ましても、初期の物質的・客観的科学である天文学・幾何学・東洋医学等々の学問では、アイウエオ五十音言霊学の原理をそのまま客観世界の現象に当てはめて、その法則を発見したものが多かったことです。

伊耶那岐の命の投げ与えた精神原理を黄泉国で摂取・研究した成果でありましょう。現在の漢方医学にはその証拠が歴然としております。筍（たかむな）は筍（竹の子）のことで、田気の子即ち言霊から出た結論と言う意味です。

その 442 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 9

その 442

古事記の本文を進めます

こを抜き食む間に、逃げ出でましき。また 後にはかの八くさの 雷の神に、千五百の黄泉軍（よもついくさ）を副（たぐ）へて追わしめき。ここに御佩（みはかし）の十拳剣（とつかのつるぎ）を抜きて、後ろ手に振りつつ逃げ来ませるを、なを追いてよ持つ黄泉平坂の坂本に到る時に、その坂本なる 桃の子三つをとりて持ち撃ちたまひしかば、悉くに逃げ返りき。

こを抜き食む間に、逃げ出でましき。また 後にはかの八くさの 雷の神に、千五百の黄泉軍（よもついくさ）を副（たぐ）へて追わしめき。

黄泉醜女がこれを抜いて食べ、研究・摂取している間に伊耶那岐の命は逃げて行きました。その後には

先に話に出ました黄泉国の 八種類の文字の原理（雷神）に、千五百（ちいほ）の軍隊を副えて追っ
てきました。

八くさの雷の神は前に話説明しましたが、千五百（ちいほ）の黄泉軍（よもついくさ）とは何のことでしょうか。千五百は三千（みち）の半分を意味します。物事の道理（三千・みち）が三千あるとするならば、その半分の千五百は精神の要素と現象の原理であり、残りの半分の千五百は物質界研究の道理ということになります。これが黄泉国の分担する研究分野の原理・法則です。

軍（いくさ）は五種（いくさ）の意味であります。五数を基本とする東洋哲学の思想もこの中に入ります。五行・五大の考え方があります。これ等の主張が自らの正当性を主張して伊耶那岐の命を追いかけてきたというわけです。八くさの雷の神と千五百の黄泉軍で 高天原日本以外のすべての外国の文化・思想ということになりましょう。

「注1」 仏教天台宗に「一念三千」という言葉がある。天台の教旨であり、今この一念の心の中に精神界のすべてが備わっているという意。そのすべてとは基本数五から十、五十、百、千、三千に展開される、と説く。

その 443 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 10

その 443

ここに御佩（みはかし）の十拳剣（とつかのつるぎ）を抜きて、後ろ手に振りつつ逃げ来ませるを、

十拳の剣とは、前にも度々出てきましたが十数もってする判断力のことです。精神的なことを述べるときに出てくる杖（つえ）・剣という言葉は全て人間天与の判断力、哲学的に言えば統覚（とうかく）のことです。

伊耶那岐の命はその剣を「後手（うしろで）に振りつつ」逃げた、とあります。判断力を前手（まえで）に振ると言えば一つの原理から「一二三四五六七八九十」と演繹的（えんえき）にいくつもの法則に発展・展開して行くことであります。

後手（うしろで）に振る、とありますから、それとは反対方向にいくつもの主義・主張・法則を「十九八七六五四三二一」と帰納的にただ一つの原理、ここでは十拳の剣の出所である高天原のアイウエオ五十音の原理、伊耶那岐の命が心中に確立している建御雷の男の神の原理に戻って行って、それらが黄泉の国の主義・主張が精神音図のどの位置を占めるべきものか、を判断し、整理し、それらが人類の文明を創造する役割を決定して行く方法を確立して行くことであります。この心の操作の工程を後章で「身禊」（みそぎ）と呼んでおります。

その 444 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 11

その 444

なを追いてよ持つ黄泉平坂の坂本に到る時に

雷神（いかづち）と黄泉軍（よもついくさ）は尚追いかけてきました。そして黄泉比良坂（ひらさか）の坂本に到着した。比良（ひら）とは霊顕（ひら）で文字のこと、比良坂とは文字の性（さか・坂）で文字の原理のこと。その坂本（さかもと）といえば外国の文字の性質の根本原理ということになります。

伊耶那岐の命は逃げながら自らの自覚する建御雷の御の神の精神構造図に照らし合わせて、外国の文化の諸法則の整理・処理法について勉強しました。そして外国文字の根本原理の処理の方法を確立したところで、高天原精神界と外国の物質的、客観的研究の世界との決定的な相違点、決して交わることのない両者の境界線を明確に自覚したのでした。

その坂本なる 桃の子三つをとりて持ち撃ちたまひしかば、悉くに逃げ返りき。

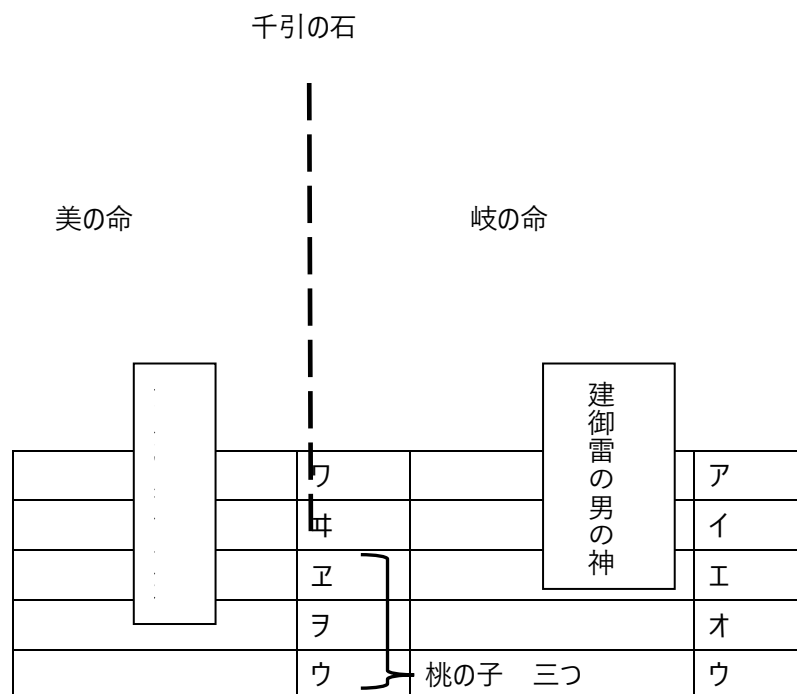
黄泉比良坂（ひらさか）の坂本とは、物質的・客観世界の研究が高天原精神界に近づく最終極限の線であることを伊耶那岐の命は知りました。その線は同時に高天原精神界の限界線でもあります。

それは先に伊耶那岐の命が妻神伊耶那美の神を追いかけて黄泉国へ出かけて行った「殿（との）の騰戸（あがりど）」でもあります。（次ページの図参照）

その境界線（坂本）の高天原側半母音ワヱヲウです。そこにある桃（もも）の子（み）三つと言えはヲウの三言霊でまであります。桃とは百のことで五十の言霊と五十の操作法、計百個の原理です。

その子と言えは、百個の原理が生み出した結論三つということです。この詳細この「古事記と言霊」のお話の総結論として後程解説されますけど、今は簡単にヲウの三言霊と申し上げておきます。ヱは実践知
エの結論、ヲは経験値オの結論、ウは五感覚意識の結論です。

伊耶那岐の命は黄泉の国で経験した未完成の客観分世界の文化や、追いかけてきた雷神（いかづち）、醜女（しこめ）、黄泉軍（よもついくさ）等の文化・法則の内容を処理する方法を研究し、自覚は完成させて、その結論である言霊アヲウの桃の子三つをもって示しました。その素晴らしい自覚内容に驚き、到底客観世界の研究方法では到達し得ない境地であることを知って悉く逃げ帰っていきました。



その 445 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 12

その 445

古事記の本文に戻ります

ここに伊耶那岐の命、桃の子に詔りたまはく、「汝（いまし）、吾を助けしがごと、葦原の中つ国にあらゆる現（うつ）しき青人草（あおひとぐさ）の苦（う）き瀬（せ）に落ちて、患惚（たしな）まん時に助けてよ」とのりたまいて、意富加牟豆美（おほかむづみ）の命という名を賜ひき。

伊耶那岐の命は桃の子に言いました。「お前達が今、私を助けたように、今後この高天原

日本の国の住民が、困難な状況に陥って苦しむことがあったら助け上げてくれよ」と言って桃の子に意富

加牟豆美（おほかむづみ）の命という名を授けました。意富加牟豆美の神とはおおいなる（意富・おほ）

神（加牟・かむ）の実体（神）という意味です。

「注 1」梅若の狂言で「桃太郎」の中で、仕手の桃太郎は自らを意富加牟豆美の命と名乗る。桃太郎とは百太郎の意で、言霊の百の原理から生まれた総結論である三貴子（天照大神・月読の命・須佐之男命）の長男（太郎）と言うこと、即ち天照大神のことを指している。

言戸（ことど）渡（わた）し

最後にその妹伊耶那美の命、身みずから追ひ来ましき。ここに千引（ちびき）の石（いわ）をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石を中に置いて、おのもおのも対（む）き立たして、事戸を渡す時に、

古事記はいよいよ伊耶那岐・美二神の事戸渡（ことどわた）しの場面に入ってきました。事戸渡しを日本書紀は「絶妻（ことづま）の誓（わた）し」と書いてあります。夫婦の離婚のことです。

現在社会では夫婦の離婚は珍しいことではありません。ですから伊耶那岐、伊耶那美二神の離婚と言っても、神様の家庭の出来事か、くらいに軽く考えてはいけません。

人類の文明を創造して行く上で人間、の心の主観と客観という二つの分野の決定的な違いが確認され、宣言されるという重大事件が起こることになります。

初めに伊耶那岐の命は妻神伊耶那美の命と共同で三十二の実相子音を生みました。先天十七個、後天三十二個計四十九個の言霊が揃いました。言ってみればこれらの言霊は大自然が人間に与えてくれた天与の性能です。

次に四十九音を神代表音文字に表しました。言霊ンです。これで言霊五十音が揃いました。岐・美神の共同作業はここで終わり、美の命は本来の自らの領域である客観世界に去っていきます。

その 446 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 13

その 446

伊耶那美の命が黄泉の国客観世界に去った後に、伊耶那岐の命は自らの責任で五十音言霊の操作方法の研究をし、その結果心の中に建御雷の男の神という文明創造上の理想の精神構造を確立・自

覚することができました。しかしこの 真理は自分の心にのみ確かめられる心理（自証）であり、如何なる時、如何なる場所に於いても妥当であるか、の証明（他証）は、この真理を再び客観世界に当てはめて調べてみなければ得られません。

そこで岐の命は去って行った美の命の居る客観世界研究の黄泉の国に追いかけて行き、そこで不完全・不調和である客観世界の文化の内容を体験し、その不調和の姿に驚いて 高天原に逃げて来ました。逃げながら自らの持つ精神原理を投入して、外国の文化の整理・摂取の方法を研究しました。

その結果、外国の客観世界の文化の内容の全てである八くさの雷の神と千五百の黄泉軍とを撃退させたのです。すなわち外国文化の一切を整理する方法を確立した事になります。

その整理方法の確立した結論として、主体である精神界と客体である物質界とでは、その研究方法が全く違うこと、それゆえに客観的学問である 物質科学文明の完成を見るまで、精神文明の 粹である布斗麻邇の原理は高天原日本に於いて保持・継承し、物質科学文明は四方津国（よもつくに）である外国において創造発展させていくのが歴史的に適當である、と言う事に気付いたのです。精神文明創造の責任者である岐の命と物質文明創造の責任者である美の命はお互いに分担する世界を異にするために、ここに離婚することと成ります。

その 447 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 14

その 447

最後にその妹伊耶那美の命、身みずから追ひ来ましき。

黄泉の国の言葉・文字の原理・内容である雷神と文化の全ての研究内容である千五百の黄泉軍（よもついくさ）が全部撃退されてしまいましたので、最後に客観世界文明の責任者であり総覧者である伊耶那美の命自身が追いかけて来ました。ここで純主体と純客体両世界の責任者が真っ向から対立することになります。主体客体の意義が大きなテーマとして取り上げることとなります。

ここに千引（ちびき）の石（いわ）をその黄泉比良坂に引き塞へて、その石を中に置きて、おのもおのも対（む）き立たして、

黄泉の比良坂に千引の石を置きその石を中にして伊耶那岐の命と伊耶那美の命はお互いに向け向かい合いました。黄泉の国の客観的・概念的な学問・文化を、十拳の剣である言霊の原理に照らして検討し、整理してきて、その時まで主観的にのみ自覚されていた言霊五十音の原理が、他の文明社会に適用して間違いの無い客観的原理でもあることを確かめることのできた伊耶那岐の命は、黄泉比良坂に千

引の石を置いて、ここまでは 黄泉の国の客観世界研究の領域、ここからは高天原精神原理の世界と、
厳然とした一線を引いて区別した、ということでもあります。

千引の石（ちびきのいは）とは 千（ち）を道と解釈しますと、字引き等の言葉に見られますように、道
理を明らかに示したいは石（いは）、即ち 五十音（いほ）言霊ということになります。

千を血とけば伊耶那岐・美二神の協同で生んだ（血を引いた）三十二の子音言霊ということでありま
す。黄泉比良坂である外国文化の文字の原理と高原の精神文明の原理との最も際立った違いである
五十音（三十二音）の言霊を配列して、両文明の領域に劃然（かくぜん）とした区別を確定したの

でした。

伊耶那岐の命は言霊母音で表される主観的精神世界の生命の自覚者であります。それに対し伊耶那美の命は言霊半母音で示される客観的な現象世界の研究者であります。岐の命は、生命内容を内に観じて、生命の目的を自覚する責任者であるのに対して、美の命は現象を自らの外にのみ観て、生命がどの方向に向かっているか、などの自覚については全くの盲目であり、無自覚です。

伊耶那美の命の努力によって現在、巨大な物質科学文明が建設されました。けれど この科学文明を人類の福祉の目的にどうしたら融合させ適合させることができるか、の方策は、物質科学自体からは何も決

定することはできない、という事実がよくそれを示しています。両者の住む処は、言い換えますと両者の文明創造の領域は、生命活動の二大分野として決定的な相違があります。その区別をする一線として千引の石が置かれたのでした。

その 448 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 15

その 448

事戸を渡す時に、

事戸を渡す、とは日本書紀に「絶妻（ことつま）の誓（わたし）」とありますように、伊耶那岐の命と伊耶那美の命が離婚をすることです。言霊の学問から言えば、事戸は言の戸の意味で、伊耶那美の命の研究領域は黄泉比良坂のここまで、これより内側は高天原の精神原理の領域であって、伊耶那美の命の研究対象としては手が届かない世界なんだよ、とはっきり区別し、宣言してしまった事です。

その印としてその境目に言である言霊の扉（戸）を立ててしまったのです。その言霊とは主として三十二の子音言霊の配列です。

黄泉国の外国に於いても、五十音言霊の中の五母音については、東洋哲学に於いて概念的ではありますが、五行（中国）や五大（印度）などで説かれており、また八つの父韻についても易経で八卦（乾兌離震巽坎艮坤）仏教で八正道と説明されています。けれどそれらが父韻と母音から生まれる三十二の子音となりますと、日本古来の言霊布斗麻邇の学問独特のものでありまして、高原日本の精神の秘宝であり、いわば世界の精神界の奥の院にあたるものです。その三十二の子音言霊を配列して、高原精神界の結界としたのでした。

「注 1」 現在建築工事の地鎮祭で、敷地の中央に竹の四柱を四辺形を劃（かく）するように立て、それを七五三 縄で結び、祭壇を作る。これが結界である。結界の中には魔である災厄（やくさい）が入らぬよう、工事が無事に終わるよう祈願が行われる古事記のこの千引の石の記述の名残である。

その 449 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 16

その 449

古事記の本文に戻りましょう

伊耶那美の命のりたまわく、「愛（うつく）しき我が汝兄（なせ）の命、かくしたまはば、汝の国の人草、一日に千頭絞（ちかしらくび）り殺さむ」とのとのりたまひき。ここに伊耶那岐の命、詔りたまはく、「愛しき我が汝妹（なにも）の命、汝然（みまししか）ししたまは、吾は一日に 千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。ここを以ちて一日に必ず 千人死に、1 日に必ず千五百人なも生まるる。

「我が汝兄の命、かくしたまはば」とは 伊耶那岐の命が千引の石を置いて、岐の命の主体的精神界と美の命の客観的物質界との間に厳然とした区別をしてしまった、からには・・・の意味であります。岐の命の世界は物事を総合し、創造して行くことを基調としているのに対し、美の命の客観的な研究、は物事を

分析し、破壊することによって本質に到達しようとする世界です。

物事を分析・破壊するということは、その物事に付けられた名前を破壊する事と同じです。物事の名を否定して、分析し、その部分に概念的な名前を付けていくことです。ですから伊耶那美の命が「汝の国の人草、一日に千頭絞（ちかしらくび）り殺さむ」と言ったのは、必ずしも高天原に住む人々を首を絞めて殺そうという意味ではなく、高天原の言霊原理に基づいてつけられた物事の名前を否定して、分割し、経験値に従って概念的な名前に変えてしまおうと宣言したことでもあります。

この宣言に対して伊耶那岐の命はあなたがそうするならば、（世の中は乱れてしまうでしょうから）私はあなたが破壊する言葉の数より多い一日千五百の正統な言葉を生んで、この世に流布させましょう」と言ったのでした。

その 450 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 17

その 450

高天原の言葉を破壊し、乱すということについてさらに考えましょう。例を挙げますと言霊ワに基づいた言葉に和があります。この和という大和言葉を平和という言葉に置き換えてみましょう。それでは意味は変わらないように見えます。けれどこの平和という言葉からいろいろな概念的な言葉が発達して行きます。

平和を何も起こらない平穏な状態とします。けれども階級闘争で言えば、資本家と労働者との間には相互に、矛盾をはらんでいます。労働者側にとっては、常に団結し資本主義者側と闘っていくことの中のみ自分の生存の権利を主張することができる、と考えます。そこには何事も起こらない「平和」などは抑圧された罪悪としか考えられないでしょう。

労働階級にとっての真の平和は力によって「闘い取る」というより他はないと考えられます。

しかし 言霊原理における言霊ワ、はそれに基づく和とは絶対的な和なのです。どんなに論争をしているときでも、殴り合いの喧嘩をしているときでさえ、双方の心は和なのです。強いて言えば、その論争もけんかも、更にお互いが仲良くなるための論争であり、喧嘩なのです。大和言葉の和と概念的な平和という言葉との相違をご理解いただけたであらうでしょうか。

その 451 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 18

その 451

キリスト教に 原罪 original sin という言葉があります。辞書には「キリスト教で、人類の祖アダムが禁断の木の実を食べたために、人間が生まれながらにして負うとされている罪」と説明されています。禁断の木の実とは何でしょう。生まれながらにして負う罪とはどんな罪なのでしょう。

それが今お話している高天原の、神即言葉、言葉即実相である言霊原理に基づいて作られた大和言葉を破壊し、禁断の木の実と言われる人間個人の経験知より作られた概念的な言葉に置き換えてしまったことから起こる罪のことです。

日本の言葉でこの罪のことを天津罪と呼びます。高天原の言霊原理の言葉の法則を乱す 形而上の、
精神の基本に根ざした罪です。

高天原の精神原理を夫神伊耶那岐の命と共同で創造した伊耶那美の命は、その後高原から黄泉の
国外国に行き、独自の客観世界研究の学問を建設するために夫神と離婚し、まず最初に実行したのが
「高天原の言葉を破壊する」ことでありました。

その結果、創造されたのが、現在私たちの眼前に展開している物質科学文明です。この文明の中心である研究・学問を科学、即ち科（とが・罪）と呼ぶのには以上のような経緯があるのであります。精神文明において、第二の文明である物質科学を早急に建設するためにとられた方便としての神の大ドラマということができます。

その 452 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 19

その 452

古事記の本文を進めていきます

かれその伊耶那美の命に名づけて黄泉大神（よもつおおかみ）といふ。またその追及（し）きしをもちて、道敷（ちしき）の大神ともいへり。またその黄泉の坂に塞（さは）れる石は、道返（ちかへし）の大神ともいふ。塞（さ）へます黄泉戸（よみど）の大神ともいふ。かれそのいわゆる黄泉比良坂（よもつひらさか）は、今、出雲

の国の伊賦夜（いぶや）坂といふ。

かれその伊耶那美の命に名づけて黄泉大神（よもつおおかみ）といふ。

事戸（ことど）を渡して、夫神伊耶那岐の命と離婚をして、黄泉の国外国において客観的な学問・研究、物質的・科学文明の建設の総責任者を担った伊耶那美の命は、そのとき以来、黄泉大神と呼ばれるようになります。「その伊耶那美の命」の「その」とは、千引の石によって高天原の精神界とはっきり区別された客観世界の研究総覧者となった伊耶那美の命という意味であります。尚、その美の命に黄泉大神と「大」の字が付けられる理由は後程解説されます。

またその追い及（し）きしをもちて、道敷（ちしき）の大神ともいへり。

十拳剣を後手（しりで）に振って高天原へ帰ろうとする伊耶那岐の命を追いかけて来て、そのために此所までは黄泉の国、ここよりは高天原と、高天原精神界の結界を自覚・完成させる結果となりました。その功績の意味で伊耶那美の命を道（道理）を敷（敷）いた大神とも呼びます。

たその黄泉の坂に塞（さは）れる石は、道返（ちかへし）の大神ともいふ。塞（さ）へます黄泉戸（よみど）の大神ともいふ。

黄泉の平坂に置かれた千引の石は道返（ちかへし）の大神といいます。道返（ちかへし）とは高天原の方から見ればここまでは高天原、これより外は黄泉国と、どちらからもそこで道を引き返すこととなります。

千引の石はその厳然たる指標であります。またその石は高天原と黄泉国との間に置かれて、黄泉国より高天原へ入る交通を厳しく阻（はば）んでいます。塞へます黄泉戸王大神と呼ぶ所以です。

事実、読者が言霊布斗麻邇の学問を学ぶ場合、言霊学の概要については読者ご自身の持つ経験値によってほぼ理解することは可能です。けれども言霊学を理解し、自覚し、その学問を持って社会に貢献し、人類の歴史の見通しを自らぬものにしようとするとき、ここに説かれている「塞へます黄泉戸大神」が自らの心の中に敢然と立っていることを初めて意識します。それより先の仕事には自らの経験知の現界をはっきりと認識し、人間天与の高天原の清浄心に立ち返ることの必要を痛感されることと成りましょう。

「注 1」言霊五十音の麻邇の七五三（しめ）縄によって結界された高原精神界を古来「玉垣の内津御国、磯輪上（しわがみ）の秀真の国、敷城島（しきしま）の大和（やまと）の国」などと呼ぶ。玉は言霊を、磯は五十（いそ）を意味している

その 453 につづく

島田正路氏著書「古事記と言霊」より抜粋

黄泉国 20

その 453

かれそのいわゆる黄泉比良坂（よもつひらさか）は、今、出雲の国の伊賦夜（いぶや）坂といふ。

黄泉比良坂（よもつひらさか）とは高天原以外の外国の文化、特に外国の文字の性質ということです。

でありますから出雲の国の伊賦夜坂（いぶやさか）とは、地図上地名のことではありません。それは頭脳

内に次々と雲の湧き出るように（出雲）現れ出てくる考え（アイデア）を言霊を用いることなしに表現

した言葉という意味です。言霊である伊（言霊イ）の言葉（賦・ふ）がぼんやりとしか見えない夜の文

明・文字の性質（さか）という意味の謎であります。

さてここで「古事記と言霊」というお話のテーマからは少々脱線気味になるかもしれませんが、今までお話ししてきました黄泉の平坂に置かれました千引の石、塞へます黄泉戸の大神の文章とあまりにもよく似た意味の文章がありますので、ここで紹介しておきましょう。それは旧約聖書のヨブ記 38 章に見られます。

「海の水が流れ出て、胎内より湧きいでし時、誰が戸以てこれを閉じ込めたりしや、かの時われ雲をもて之が衣服となし、暗闇を持って之が襦袢（むつき）となし、之に我が法度（のり）を定め、関および門を設けて、曰く、此所までは来るべし、此所を超ゆるべからず、汝の高波ここに止まるべしと」（旧約聖書ヨブ記 三十八章八～十一）

ヨブはイエスキリスト以前のキリストと呼ばれた人で、このヨブ記に古事記と全く同じ意味の文章が観られることは興味深いこと でありましょう。詳しい詮索は抜きにして、今回は字句の説明だけに留めます。「海の水ながれ出て胎内より湧き出しい時・・・」とは黄泉国の雷の神や黄泉軍（よもついくさ）をさします。

伊耶那美之命の思想上の後継者である須佐之男命は「海原（うなはら・ウ言霊の領域）治（し）らす神」であります。「雲を以て之が衣服となし、暗闇を持って之が襦袢（むつき）となし」とは、雲は八つの父韻、黒暗とは五母音のことです。「関および門を設けて」とは千引の石を比良坂に置いたことに通じます。汝の高波ここに止まるべし」とは塞へます黄泉戸の大神と同様のことでありましょう。ヨブ記のこの文章と古事記の黄泉比良坂の記事は全くの同一の事柄を述べていることにお気づき頂ける事と思います。

以上のような地球上の時も処も全く違った記述、が意味内容の同じ文章として残されているという事実は、人間の精神の根本構造の立場から見た人類歴史の考察に大きな示唆を与えてくれるものとして、脱線的な文章を挿入して見ました。ご参考になれば幸いです。

その 454 につづく

